

乳幼児教育の質の向上ニュースレター

「第5回保幼小架け橋研修会」を実施しました

- I部 架け橋活動を振り返る
- II部 各自の実践を振り返る

参加園/校

朝来小学校 余内小学校 池内小学校 大浦小学校 岡田小学校
 倉梯小学校 倉梯第二小学校 志楽小学校 新舞鶴小学校
 高野小学校 中筋小学校 中舞鶴小学校 福井小学校 三笠小学校
 明倫小学校 由良川小学校 吉原小学校 与保呂小学校
 中保育所 朝日幼稚園 朝来幼稚園 永福こども園
 岡田こども園 さくらこども園 シオン幼稚園 昭光保育園
 相愛こども園 平こども園 橋幼稚園 タンポポこども園
 なかずじこども園 中舞鶴幼稚園 東山こども園 ルンビニこども園
 うみべのもりこども園 舞鶴こども園 池内幼稚園 ひばり幼稚園

保幼小架け橋活動(以下架け橋活動)を振り返り、架け橋期の保育・教育の充実を図るため、第5回保幼小架け橋研修会を開催しました。

今年度も、各協力園校で、架け橋活動で期待することの姿を、架け橋期(5歳児～1年生)の担任である保育者と教師が互いに理解した上で、「学びを深める 学びをつなぐ」架け橋活動にしようと、工夫して取り組んでいただきました。

I部では、実践の中から、保幼小架け橋カリキュラムモデル園校として取り組んでいただいている三園校の架け橋活動について、橋幼稚園 大槻智美先生、うみべのもりこども園 出石真美子先生、三笠小学校 大北大地先生とともに、「学び(ねらい)」を明確にした実践について報告を行いました。

II部では、今年度公開保育、公開授業をお世話になった園や学校の実践から、架け橋期に大事にしたいポイントを紹介しました。

各グループワークでは、「学び(ねらい)」のある架け橋活動とするための工夫や関わり等について、また、「学び」を意識した保育・教育実践について、交流を行いました。

今年度、架け橋活動や架け橋期に大事にしたい点について、自園・自校においても広げていただくことを期待しています。



橋幼稚園、うみべのもりこども園、三笠小学校の保幼小架け橋活動～実践報告より抜粋～

橋幼稚園、うみべのもりこども園、三笠小学校では、毎回、事前の打ち合わせで、子ども達にとってどのような学びが期待できるのかを明らかにし、そのために創意工夫をして架け橋活動に取り組みられました。「学び」を意識することで、いつもと異なる集団の中でも自己発揮する姿が見られたり、子どもの新たな一面が見られたり、普段接していない友達の考えを聞くことで新しい考えが生まれたりするなど、子ども達にとって「互恵性」のある活動になりました。

また、保育者・教師にとっての「互恵性」として、架け橋活動での活動内容、環境の工夫、言葉がけなど、保育者・教師自身が学ばれたことを、日々の保育・教育実践でも意識されていました。

期待することの姿

- 5歳児 自分の思いや考えを自分の言葉で伝え、友達の思いや考えを聞き、さらに考えたり工夫したり試したりしながら、友達と一緒に意欲的に遊ぶことを楽しむ。
- 1年生 園児と関わる活動を通して、自分の考えを伝えたり相手の考えを受け入れたりする中で、協働して主体的に活動に取り組む。

7月 ドッジボールあそび

ねらい

子ども達が自分達で考え、相談して遊びが進む
 自園・自校以外の友達のすごいところを、言葉で伝えたり聞いたりする

子どもの興味・関心をいかす

学びを引き出す関わり

他園校の5歳児や1年生を意識できるように言葉をかける

子どもの気付きを待って、5歳児・1年生と一緒に相談する

5歳児が「1年生とドッジボールをやりたい」と言ったことから計画された「ドッジボールあそび」。園校紹介の後、「違う園や学校の友達がボールを投げたり受けたりする姿から、すごいな、カッコいいなを見つけよう」と見通しが持てるように言葉をかけることから始まりました。

園校対抗のドッジボールでは、普段のように自分達で外野を決める姿や、負けてしまい自然に作戦会議を開き気付いたことを伝え合う姿が見られました。

また、子どもから人数が違うことに気付くことを待って「どうする?」と問いかけられました。そして、子ども達から意見を引き出され、各園の5歳児、1年生が半分に分かれ、全員でドッジボールをすることに決まりました。

振り返りでは、子ども達は、「ねらいを定めてボールを投げた」「○○ちゃんの投げ方がかっこよかった」「ジャンプしたり足をパーにしたりしてよけた」等の感想を伝えました。進んでいた保育者が名前が出てきた子のところにも行ってコツを尋ねると、嬉しそうにジェスチャーを入れながら話す姿が見られました。自園・自校以外の友達のことを知ったり興味を持ったりするきっかけになりました。



まんなかのせんまでいってなげよう

ボールをよくみてにげよう

あいてがねらいにくいように、うごきまわったほうがいい

自立心

7月 うみべのもりこども園
 10月 橋幼稚園
 11月 三笠小

ドッジボールあそび

- ①ころがしドッジ
- ②園校対抗ドッジ
- ③みんなでドッジ

するするビューンであそぼう!

- ①一人で作る
- ②滑らせる(試す)
- ③次回の相談

するするビューンであそぼう!!

- ①チームで作る
- ②滑らせて工夫する
- ③紹介する

◎ 主体的に楽しむ、試行錯誤する思いや考えを言葉で伝え合う架け橋活動にしたい

◎ 自園・自校以外の5歳児や1年生から影響を受け合う架け橋活動にしたい

10月 するするビューン 1回目

ねらい

5歳児：チームの友達に分からないところを聞いたり教えたりして「するするビューン」を作って遊ぶことを楽しむ

1年生：チームの5歳児に分からないところを教えながら「するするビューン」を作って遊ぶ

学びを引き出す関わり

他のチームから工夫を聞き、新しい視点に気付くことができるように、途中でインタビューを入れる

一緒に活動する

チームの5歳児や1年生に分からないところを聞いたり見たりして作り、試行錯誤して滑らせて遊ぶことができるようにグループ活動を取り入れる

学びを引き出す関わり

はじめの会で、後でチームで取り組んだ滑らせる工夫を、実際に見せながら聞き合うことを伝え、ねらいを共有できるようにする

11月 するするビューン 2回目

ねらい

5歳児：チームの友達とやり取りしながら、考えを出し合って作ったり、工夫して滑らせたり試したりして遊ぶことを楽しむ

1年生：チームの5歳児と考えを出し合って作ったり、思うように滑らせる工夫をいろいろ考え試したりする

環境の工夫(教材)

滑らせる糸の種類、角度の設定、重りの活用など工夫し、試行錯誤できる場所を1回目より多くつくる

秋の架け橋活動は、1年生が図工で作って遊んだ「するするビューン」に取り組みました。

【事前の打ち合わせ】

事前の打ち合わせでは、「校舎や階段など高低差が大きく取れる学校で滑らせると、ダイナミックな遊びができそう」「角度などで遊び方の工夫ができそう」「グループで一緒に作るのも楽しそう」「グループで作る前に一人一人が作って遊ぶほうが5歳児も自己発揮できそうだね」など、意見が出されました。そこで、1回目は、チームに分かれ個々に1つずつ作り滑らせて遊ぶ、2回目はチームで1つ作り滑らせて遊ぶことに決められました。

【するするビューン 1回目】

1回目は、チームの友達とやり取りしながら、分からないところを教えてもらって作ったり、滑らせたりすることを大事にしたいと考えられました。保育者・教師の後押しがあり、だんだん打ち解け、自分から関わる姿が見られました。

子ども達の多くが、時間をかけて工夫して作っていました。けれど、滑らせる遊びの方に時間がかけられなかった様子も見られました。



【事後の振り返り】

事後の振り返りでは、

- ・作るイメージは持っていたけれど、滑らせて遊ぶイメージを持ちにくい子がいたり、材料が豊富だったので作ることに時間を多く使ったりして、滑らせる工夫に十分な時間が取れなかったのではないか。材料をしぼってみてはどうか
- ・今回は、制作の途中でインタビューをして、作る工夫について自分の言葉で話し、チーム以外の友達に広げられたのは、よかった。次回は、滑らせる工夫をしているチームにインタビューをしよう

チームの中で、より関わりが持てるように、言葉をかけよう

より滑らせる工夫を自分たちで考えて試行錯誤できるように、会場となる三笠小学校体育館で、もう一度打ち合わせをしようといった相談をされました。



子どもの姿から学びを共有し、よかったところそうでなかったところも話し合っ、次回にいかす事後の振り返り

架け橋活動を振り返って

◎ 年齢や経験が違う子ども達が集まる架け橋活動は、子ども達にとって様々な刺激を受けるよい機会だと実感しました。事前・事後の打ち合わせでは、5歳児も1年生も自己発揮でき、自分で試行錯誤することに加え、他園校の友達の気付きからもアイデアを得て試行錯誤ができるようにしようというねらいを共有し、皆で活動や環境の工夫をしっかりと考えました。日頃の保育でも、同じように意識しています。

◎ 普段はどちらかと言うと控えめな性格の男の子が、架け橋活動の中では、たくさんの人達の前でもしっかりと自分の思いを言葉で伝える姿に、驚きました。日頃の保育の中でも、そういう場を大事にしたいと思い、みんなの前で自分の思いを伝えることができるような時間を設けるようにしました。今後とも、継続していきたいです。

◎ 架け橋活動では、子どもの気付きを引き出す言葉がけをすることを意識しました。日頃の学習でも、特に生活科では、子どもが気付きを言語化することで、気付きを自覚できるようにしています。また、その気付きをいかす学習計画にしています。

【するするビューン 2回目】

2回目は、子ども達がめあてをしっかりと意識できるように、「チームで作成したり、滑らせたりしよう。そのために、手伝う、相談する、聞き合うなど、協力しよう」と強調されました。また、見通しを持たせようと、「振り返りで、こんな風に滑らせたいなと思って、チームで工夫したことを紹介しよう」ということを伝えられました。

前回チームで相談したものを、早速、作り出す子ども達。意見のまとまらないチームには、保育者や教師がやり取りのきっかけを作ることで、相談したり、役割分担をしたりして作っていました。

作れたチームから滑らせる場所に行き、作ったものに合うイメージを持ちながら滑らせる工夫をしていました。



自分の言葉で工夫を伝えてほしい、新たな視点を持ってほしいと、途中でインタビュー

振り返りでは、子ども達は、自分の言葉で滑らせる工夫について話しました。紹介の時にクリップが取れて、上手く滑らなかったチームがありましたが、みんながその場で考えを出し合って、滑り切るまで試行錯誤を繰り返す姿も見られました。

聞いている子ども達も、糸の角度や材質、滑らせるものの大きさや形、クリップの位置などについて、自分達のしていた工夫と比べながら、気付きを確かなものとしていました。



滑る様子を見せた後にインタビューをして、気付きや工夫を全体で共有する振り返り